# 美博だより VOL.70

飯田市美術博物館ニュース――――2005.7.1

発行●飯田市美術博物館　〒395−0034　長野県飯田市追手町2−655　☎ 0265−22−8118　印刷●株式会社 秀 文 社

飯田城絵図　下伊那教育会蔵

## 扉絵は何を語るか

館長　井上　正

風越山は、日本各地の山がそうであるように、太古から神霊の依り代として信仰されてきた。そして中世紀末葉に新たに加賀の白山神が勧請（分霊を祀る）され、山頂に社殿が営まれた。その折、白山の場合になぞらえて、登拝路の要所に当る虚空蔵山頂に中居の社を設けた。

やがて奥社の三神像を祀る造り付けの厨子の六枚の扉絵として、その表には縵幕と総角、裏（内側）には神を讃嘆しあるいは守る瑞鳥、霊獣の類がそれぞれ描かれた。

これらの聖なる鳥獣が発する霊気は、神の神威の力を通して、山上から平地へと降りそそぐ。それは太古からの信仰である生命を育む深山の力と一体化している。

今まで、この神像、扉絵は人の眼にほとんど触れることがなかった。この度の神殿修理と、扉絵二枚の当館への出品の機会をとらえて、製作年代や作者の研究に力を注がなくてはならない。伊那谷の歴史研究における大事と心得るべきであると思う。

特別陳列

# 「絵図でみる飯田城」

7月16日（土）～8月18日（木）

「丘の上」とよばれる飯田――この街は飯田城を中心とする城下町として成り立ちました。その起こりは室町時代に始まったと考えられますが、戦国時代に伊那谷を支配した武田信玄以来、飯田下伊那地方の要の城として重視されました。安土桃山時代には、毛利・京極氏によって一〇万石の城下町として整備され、江戸時代になると、とりわけ堀氏時代にはわずか二万石前後の城下町であるにもかかわらず、飯田下伊那地方の中核をなす都市として、経済や文化においても、たいへん栄えたのでした。

ところが、明治四年（一八七一）に飯田城は廃城となって徹底的に破壊され、城下町の町並みもしだいに姿を変えていきました。さらに、一九四七年（昭和二十二）の大火によって街の大半を焼失してしまいました。そのため今日では、城と城下町を思い起こさせる史跡はほとんど目につかない状況です。

そこで本館では、古絵図と照らしながら隠れた史跡を訪ね歩き、飯田の成り立ちを知ってもらいたいと願って、『飯田城ガイドブック』をこのたび刊行いたしました。

本特別陳列は、この冊子の中で紹介した絵図を中心に、飯田城関連の資料を展示いたします。本物の史資料をご覧いただいて飯田城と城下町に思いをはせ、街中を歩いてみてはいかがでしょうか。

■**展示解説会**　7月17日（日）・24日（日）・30日（土）、8月7日（日）・13日（土）　午後2時～

■**『飯田城ガイドブック』**　本館・市役所行政資料コーナーにて発売中。

特別陳列

# 「市岡家と博覧会の父田中芳男」

9月9日（金）～10月10日（月・祝）

田中芳男（一八三八～一九一六）は、明治の近代化の中で活躍した物産学者で、日本の博物館・博覧会の父とよばれます。中荒町（中央通り二丁目）にあった久々利（岐阜県可児市）の旗本千村氏の飯田役所に勤める医師の子として生まれました。

同じ飯田役所の重臣を務めた市岡家は、歴代にわたって多彩な学問教養に秀で、ことに五代智寛（一七三九～一八〇八）と七代嶢智（一七六五～一八三三）父子は、本草学を修めました。智寛の『伊奈郡菌部』は日本で最初に食菌・毒菌を区別したキノコ図鑑として知られ、収集した実物標本は、日本全国から海外にもおよぶ大変なコレクションです。また、嶢智は全一八巻におよぶ植物図鑑『本草図彙』を表しています。

そして田中芳男は、そうした市岡家の影響を幼くして受けたのではないかと推測されます。

本年は愛知万博の開催年にあたります。そこで、昨年開催した企画展「江戸時代の好奇心―信州飯田・市岡家の本草学と多彩な教養―」に引き続き、市岡家と田中芳男に関わる資料を特別陳列いたします。

**（付属事業）**

■**講演会「万国博覧会と田中芳男」**
9月24日（土）午後1時30分～
講師（未定）

■**講演会「尾張本草学と市岡家」**
9月25日（日）午後1時30分～
講師…遠藤正治氏

「東京上野公園水産博覧会」明治16年

# 作品と出会う4「菊慈童」

9月9日（金）～10月10日（月）

九月九日（陰暦では本年は）は陽数である奇数の「九」が重なるために「重陽の節句」と呼ばれています。他の奇数が重なる三月三日、五月五日、七月七日もそれぞれ「桃の節句」「端午の節句」「七夕の節句」と呼ばれ祝事の日として親しまれてきました。その最も年長の数字である「九」を重ねる節句は、長寿を願う日として知られています。

重陽には、菊の花を酒に浮かべて飲むという風習がありました。この菊酒は長寿の霊薬とされています。中国には菊水（菊潭）と呼ばれる河があり、その下流の村はことのほか長寿であるとされました。どこか養老の滝の伝説を思わせる物語です。

「菊慈童」はこの説話の登場人物です。周の穆王に仕えた慈童が大罪を犯し深山に流され、法華経を書き付けた菊の葉からしたたり落ちた水を飲んで数百年も若さを保ったというのです。能の演目にも取り入れられるこの伝説は、多くの人に親しまれてきました。「菊水」や「喜久水」といった日本酒の銘柄に使われ、祇園祭の菊水鉾には慈童童の人形も乗せられます。花札にある菊に杯の絵柄もこの伝説を示したものです。

近年、この菊慈童の物語に隠された様々な秘密が明らかになりました。実は菊慈童は中国ではなく日本で生み出された人物であるという意外な事実も分かってきています。

本年は、菱田春草の名品「菊慈童」が館蔵品になって初めて「重陽の節句」の時期に作品を展示することにしました。菊の花が香る季節、古い伝説に思いをめぐらせながら、春草の世界を旅してみてください。

「菊慈童」部分

## 調査ノート 白山社奥社の扉絵

飯田のシンボルというべき風越山（標高一五三五㍍）の山頂には、白山社奥社の社殿が建っています。

同社は山麓にある白山社里宮と一体のもので、本殿は遅くとも永正六年（一五〇九）には建立されていたことが明らかで大峰山寺（奈良県）に次いで日本で二番目の高所にある重要文化財でもあります。

このたび奥社保存修復委員会が組織され、同社の拝殿を六十五年ぶりに修復することになりました。これに伴い白山社にゆかりある文化財の調査を行い、奥社本殿正面の扉絵は関係者の注目を集めました。

本殿には主神である菊里姫命（くくりひめのみこと）ほか三柱が祀られており、それぞれの正面に両面開きの板扉が計六面はめ込んであります。扉の外側には縵幕と総角を描き、内側には黒漆を塗布して金箔を貼り、向かって左から麒麟、虎、鳳凰、亀、竜、白沢（はくたく）と六頭の霊獣を描いています。これらの組み合わせが意図するところ定かではありませんが、とりわけ白沢は珍しい主題です。

白沢は中国で生まれた伝説上の霊獣で、人面牛身、六つ（九つ）の眼と六本の角を持ち人の言葉を解し有徳の王の治世に出現するといわれ、日本でも江戸時代には災いを除いてくれる霊獣として信仰を集めました。

この扉絵の制作を手がけた絵師や塗師、制作年代の推定は重要な問題ですが、社殿修復の証である九枚の棟札の中には画工及び塗師の名が記されたものもあり重大なヒントを与えてくれます。

まだ検証すべき点は少なくありませんが、描かれた主題や漆絵という技法の希少性は評価すべき点であり、また歴代領主らによって高所にありながら手厚く庇護されその姿を損ねることなく今日まで伝存することに対しては、畏敬の念を抱かずにはいられません。

（織田）

白山社奥社扉絵（白沢図）

## 伊那谷の自然の魅力

### ―新参者の私信―

私はこの三月に東京から飯田に来たばかりの者です。伊那谷のことは、全くといっていいほど知らないまま、人生のぶらり旅でもするような感覚で美博に勤めはじめました。こちらに来てから三ヶ月、あっさりと伊那谷の自然にとりつかれました。まずは一目惚れといったところです。広々とした果樹園から眺める南アルプスの高嶺、生き生きとした人の営みが感じられる里山、太古の昔のロマンを秘めるハナノキ湿地などは、私を魅了するに余りあるものです。

じつは、私はめずらしい自然やきれいな自然に魅力を感じるのはもちろんですが、ごくありふれた自然の中に隠された面白い事を見つけ出すことが好きです。私は様々な植物の集まりである植物群落についての研究が得意ですが、そんな視点で伊那谷で気づいた面白いことを打ち明けてしまいましょう。

日本列島の太平洋側と日本海側は、気候が大きく違います。最も特徴的な違いは冬に降る雪の量です。太平洋側は雪が少なく乾燥するのに対して、日本海側は豪雪となります。伊那谷は太平洋側の気候になります。気候が大きく異なれば、生育する植物も異なります。しかし、特に下伊那地域には、太平洋側であるにもかかわらず、日本海側のブナ林などに生育する植物がよくみられるのです。不思議ですね、なぜでしょう？私の考えはありますが、まだよくわからないので秘密にしておきます。

このように、ありふれた自然の中にも魅力がたくさん隠されています。みなさんや私が自然の面白味を見つけ出せるのも、幸い伊那谷にありふれた自然がありのままに広い面積で残されているからです。これからも残された宝の山をできるだけくずさないように、けがさないようにしてゆきたいものです。（蛭間）

そんな植物のひとつ、イワウチワ

## インフォメーション

### 7・8・9月

### 美術博物館（0265-22-8118）

**◆展覧会◆**

・風越山とその信仰　～7／10(日)
・原人がいた頃のシカ　～8／18(木)
・絵図でみる飯田城　7／16(土)～8／18(木)
・作品と出会う3―菱田春草「鹿」　7／23(土)～8／18(木)
・長野県美術展8／28(日)～9／4(日)
・市岡家と博覧会の父　田中芳男　9／9(金)～10／10(祝)
・作品と出会う4―菱田春草「菊慈童」　9／9(金)～10／10(祝)
・信州油絵紀行　9／9(金)～10／10(祝)

**◆プラネタリウム（夏番組）◆**

「とっとこハム太郎」　～9／4(日)

**◆追手町小学校化石標本室の公開日◆**

7／31・8／7・12・13・14

**◆美博文化講座◆**

「飯田城を巡る（見学会）」　7／17(日)・23(土)・31(日)
「伊那谷の盆行事」　7／26(火)
「日本のモノづくりを若者につなぐ（シンポジウム）」　7／16(土)
「万国博覧会と田中芳男」　9／24(土)
「尾張本草学と市岡家」　9／25(日)

**◆美博特別講座◆**

「山水花鳥の悟り」　7／23(土)
「日本的表現への探求」　9／11(日)

**◆自然講座◆**

「地域の両生類について」　7／14(木)
「原人がいた頃のシカ」　7／21(木)
「里山の管理」　8／18(木)
「ヒートアイランド」　9／15(木)

**◆子ども科学工作教室◆**

「天体望遠鏡を作ろう」　9／10(土)

**◆宇宙をのぞこう（親子対象）◆**

「流れ星を探る」　7／16(土)
「太陽系の星たち」　9／17(土)

**◆星空観察会◆**

「夏の大三角と天の川」　9／3(土)

**◆夏休み自然相談教室◆**

8／12・13・14

**◆寄贈御礼◆**

・日夏耿之介『転身の頌』原稿41枚
・堀口大学『水の面に書きて』原稿108枚　栗原純夫氏

**◆臨時休館（展示作業）◆**

8／21～27・9／6～8

### 考古博物館（0265-53-3755）

**◆展覧会◆**

・特別陳列　考古学から見た飯田下伊那の渡来系文化　7／26(火)～9／11(日)

**◆考古博講座◆**

・勾玉づくり　7／31(日)
・土器焼き　9／3(土)

**◆館長講座◆**

・飯伊地方の渡来系文化　9／4(日)

**◆臨時休館（展示作業）◆**

7／20・9／30